



# 督促期限

hirotakashina

Sudden Fiction Project

高階經啓  
hirotakashina

## 12月24日のおはなし「督促期限」

---

とうとう、督促期限がやってきた。

わたしの予想に反して、督促期限は美しく若い娘だった。

「来てしまいました」

娘は恥ずかしそうに目を伏せて、そう言った。これが督促期限でなかったら、わたしは恋に落ちてしまっていたかもしれない。

「はい」他に返事のしようもなかったので、わたしは間の抜けた返事をした。「そのようですね」

それからググルといろいろなことが頭を渦巻き始めた。なぜ返すべきものを返さないまま今日に至ってしまったのか。説明しようと思えば説明することはできる。もちろんだからと言って返さなくていいと開き直っているということでは更々なく、ただもうこれは不可抗力のようなもので、どんなに返したいという気持ちがあってもいかんともしがたかったのだという事情をとにかく理解してもらいたい。

というだけのことなのだが、さて。

この娘さんに向かってそんなことを言っている自分を想像すると気持ちが萎える。そんなのは言い訳に過ぎない。そんなことをぐちぐち言っていると軽蔑されてしまうかもしれない。恐らく軽蔑なんて、そんな素振りさえ見せることなく、でも、この若く美しい娘さんは心の奥底で「この人は言い訳をしている」と感じ、わたしのことをその程度の男と見なすだろう。

「いけませんでしたか？」

娘は、考え事に熱中して黙ってしまったわたしを心配そうに見ながら言う。

「えっ？」

「来てはいけませんでしたか？」

「いや。いけないってことは」

いけませんでしたかと言われても、なにしろ督促期限である。こっちの「いけるいけない」とは関係なく来る時には来るものだろう、普通。わたしが「いけませんでした」なんて言える立場じゃないことはわかっているだろうに、なんて質問をするんだ、このひとは。督促期限という言葉から受けるイメージとは裏腹に、とにかくこの娘さんは性格がとてもしっかりしている。困ったことに。そう。困ったことに。

これが男だったら！ と、わたしは思う。これが高圧的な取り立て人の男だったら、わたしももっと気合いを入れて立ち向かうことができるだろうに。勝ち負けの問題ではなく、たとえ破れたとしても、相手が権力を振りかざし、横柄な口調で怒鳴り散らすタイプなら、こっちだって堂々と立ち向かうことができるのに。こんなに若くて美しい娘さん相手では何もできないじゃないか！

そしてわたしは気づく。そうか。それこそが奴らの狙いなのではなかろうか。高圧的な男を送り込んで、わたしは勢いづいてあれやこれやと反論する。でも若い美しい娘ならわたしは鼻白んでしまい、手も足も出なくなる。つまりわたしの逆襲を封じ込められる。そう、奴らは計算してこの娘を送り込んできたのではないか。なるほど、そういうことか。読めたぞ！

「どうされました？」

急に目を光らせ始めたわたしを見て娘さんは微笑みを浮かべ、首を傾げる。美しく整った顔に、あどけない子どものような表情を浮かべ、まっすぐにわたしの目を覗き込む。ここまで急いで歩いて来たからだろうか、頬が少し上気しうっすら赤みがさしている。

かっ、かわい〜い！

は。いかんいかん。奴らの手の上で踊らされる場所だ。そうは問屋が下ろさないぞ。どうかその手には乗らんぞ。文字通り、その手に乗って踊らされるようなことにはならんぞ。だいたい若い娘さんを送り込めば、相手の言葉を封じ込められるなどと考えているところが浅はかじゃないか。それでは若くもなければ美しくもない女性陣からクレームがつくこと必定である。

もしもだ。わたしは考える。もしも、こういうやり口をしかるべき婦人団体などに通報したらどういうことになるか。まなじりを吊り上げ上ずったよく通る声で正論を吐き散らすスーツ姿の女性に詰め寄られ、浅はかさを暴露され、しどろもどろになるやつらの姿が目には浮かぶようだ。そうだ。奴らのそういう底の浅いところについていけばあるいはこちらにも勝機があるやもしれん。

「勝機が？」

いけない。声に出してつぶやいてしまったらしい。娘さんは邪気のない表情で問いかけてくる。

。「いや、はは。何でもありません」わたしは反撃の機会をうかがっている様子を気取られないように、できるだけ神妙な表情を浮かべて言った。「で、どうなるんでしょう」

「どうなるんでしょう、って？」

娘さんがまた小首を傾げる。

「え？ ですからあなたがここに来て、ええと、つまり、もう来てしまったわけですから、あの、間に合わなかったってことですよ？」

「間に合わなかった？」

「はい」

「何が？」

「あのだから督促期限」

「督促期限？」

「え？」

「え？」

「違うんですか？」

「何がですか？」

娘さんがいまにも吹き出しそうな表情で尋ねてくる。

「何がってあなたは督促期限じゃないんですか？」

「督促期限？ わたしが？」

違ったらしい。じゃあ何だ？ 誰なんだあなたは。

「何の督促期限なんですか？」

娘は心からおかしそうに頬をゆるませ質問を投げかけてくる。

「いやあの」娘さんに話すのは恥ずかしいが、わたしはつい正直に答える。「本当はとっくに返していなければならぬものが、返せずずっとそのままに」

「でも無理だったんじゃないですか」

「え？」

「あなたは病気をされていて寝たきりで、どうにも手を打つことができなかったじゃないですか」

「どうしてそれを」

「そのことならもう大丈夫ですよ」

「へえ？」わたしは情けない声を出してしまう。「大丈夫って、だって」

「だってわたしが来たんですから」

「あなたが来たから？」

「わたしも、督促期限と言えなくもないですね」

「あなたが？ 何の？」

「まだわかりませんか？」

誰だろう？ 誰か友だちのお嬢さんだったろうか？ 親戚にこんな娘さんはいたっけ？ でもその時不意にわたしは気づく。病気で寝たきりで起きあがることもできないわたしに、こんな形で会いに来ることができるのは1人しかいないことに。

「わかりましたか？」

「まだ確信は持てませんが」

「あなたが確信を持ったとき」娘さんは少しだけ悲しげに言う。「お出かけの時です」

「もっとう、鎌を持って黒衣を着たどくろとか、そういうのをイメージしていたんですが」

明るく、まさに鈴を転がすような声で娘さんは笑い、それから言った。

「どうしてそんなことになっちゃったんでしょうね、失礼しちゃうわ」

「じゃあやっぱりそうなんだ」わたしは徐々に確信を深めながら言葉にする。「あなたはしにが

(「督促期限」 ordered by 又一-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひよっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

## 督促期限

<http://p.booklog.jp/book/41207>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41207>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41207>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.